

## 遺跡のプロセス・プランニング

### PROCESS PLANNING AND CULTURAL HERITAGE

前川 歩 (畿央大学)

MAEKAWA AYUMI (KIO UNIVERSITY)

磯崎 新 / ISOZAKI ARATA

クローズド・プランニング / CLOSED PLANNING

オープン・プランニング / OPEN PLANNING

復元 / RESTORATION 御所野モデル / GOSHONO MODEL

## 1 プロセス・プランニングの有効性

建築家の磯崎新は1963年に「プロセス・プランニング論」<sup>1)</sup>という論考を発表する。これは、磯崎の初期代表作である大分県立図書館（現、大分市アートプラザ）を設計する過程で組み立てられた方法論である。

「かりに建築が完璧に完成されたものであったならば、その完璧性こそが終末である。その建築はもはやうごかされることがないからだ。成長も崩壊も停止するのである。

どのような実体的な建築でも、私たちは完璧に停止しているものを知らない。その建築が内包する活動は徐々に変化するし、物理的にも風化し、汚れ、偶然にあるいは故意に破壊され、修理され、改変されたりする。それゆえに完璧に停止したような状況というのは、想像上にしか存在せず、実体的な存在は常に変貌の過程にあるといえる。それにもかかわらず、歴史的に建築の設計は一定の時点での完成を意図してきた。完成のあとは維持というのはなほだあいまいな概念によって放棄されることになる。とすれば、建築には現実の問題として終末などないともいえる。事実、終末論は実体のなかにはなく、方法的仮定のなかであり、イメージそのもののなかにあるのだ。」<sup>2)</sup>

磯崎は、計画という概念そのものに内在する根源的な問題をつく。計画は「一定の時点での完成」を目指

すものであるが、つくられたモノ（建築）はその時点から存在を開始するため、計画の外ともいえる時間的な変化に否応無しに巻き込まれる。よって、ある完成、完璧性を求めれば求めるほど、「その完璧性こそが終末」となってしまうのである。磯崎は、これまで歴史的にみられた計画概念を段階に分け、伝統的な計画概念が依拠する段階、すなわち計画とその形態が一对一で対応する段階を「クローズド・プランニング」とし、モダニズム以降にミース・ファン・デル・ローエらが提唱した均質空間、すなわち用途の変更、量的な拡張が当初から想定された計画の段階を「オープン・プランニング」と位置づける。これに続く、3つ目の段階として提示した計画手法が「プロセス・プランニング」である。

プロセス・プランニングによりつくられた建築について、磯崎は次のように説明する。

「時間的な推移の各断面が、つねにその次の段階に移行するプロセスであると考えする方法である。それぞれの瞬間が未来の終末と常に対置される。現在の存在と終末を同時にとらえる、ということは逆にその状況下では、常に移行していく動的なオリエンテーションの決定にすべてが集約される。いわば成長あるいは滅亡の過程そのものが建築の全体性のイメージになるものだ。」<sup>3)</sup>

磯崎の計画のイメージは、時間的経過における決定

や判断の繋がりとして、建築の全体性が獲得されるといったものである。これは、時間的経過の中で生じる変化にフレキシブルに対応して、その姿を変えていくオープン・プランニングの計画手法に似ているようであるが、根本的に異なる。オープン・プランニングでは、変化に対して計画者の判断なしに自在に形を変えるだけで、方向性への判断放棄に近い状態となる。それに対して、プロセス・プランニングは常に判断が求められる。その時々での個別の判断の集積として建築が成立する。よって、その時々に見える建築は一つの断面のようなものである。実際に、1966年に開館した大分県立図書館の姿は、設備と構造を担ったコンクリートのチューブが突如切り落とされたような形態から始まった(図1)。

60年ほど前に示された手法であるにもかかわらず、プロセス・プランニングはいまだ参照すべき事項が多い。さらに、建築に限らず、様々なデザイン行為、計画行為全般へも示唆を与える。それは、遺跡の整備においても同様であるばかりか、後述するように、遺跡の整備は扱う時間軸が極めて長い場合、プロセス・プランニングの概念は非常に有効であると考えられる。以下、プロセス・プランニングの視点から遺跡の整備について考えてみたい。

## 2 遺跡表現の困難さ

遺跡の近代的な整備は大正期より始められるが、本格化するのは戦後以降である。そこでは、地下に埋もれ、見えにくく、その価値を認識することが極めて難しい遺跡を顕在化するための整備に、まずは主眼が置かれたといえる。その表現手法は様々である。戦後において遺跡の整備手法の検討を主導した平城宮跡の整備では、効果的な表現手法が模索され、実践された<sup>4)</sup>。ここでは、多様な表現パターンを確認することができる。一例をあげれば、高低差などを復元した地形復元、出土した植物遺体・花粉分析をもとにした植生復元、往時の状況を舗装材や植栽など平面だけで示した遺構平面表示、基壇に見立てた高まりのみを構築した遺構立体表示、建物の基壇部や壁の一部まで部分的に復元



図1 大分県立図書館 竣工時外観

した部分復元、建物全体を仕上げまで復元した全体復元等々、その形態は様々である。

いずれの表現においても最大の問題は、往時の状態を完全に把握することができないことに集約される。そのため、遺跡の整備では、計画時においてその全体性を確保することが極めて難しく、平面表示や立体表示など、あくまで部分に留まるような整備が多く採用されることになる。

しかし、全体復元においては、不明部分も含めて、ある完成を遂げる必要があり、最も困難さを伴う整備手法といえる。よって、全体復元においては、復元根拠の確保や復元する技術の選択、復元時期の決定など様々な課題が表出し、これまで継続して議論がおこなわれてきた。

さらに遺跡に関わる課題として、時間の問題を避けることができない。遺跡が文化財保護法により史跡に指定されれば、その場所は半永久的に国により保存されることが保証される。この気の遠くなるような時間軸の中で、その遺跡の整備を検討しなくてはならないのである。全体復元にだけ目を向けても、一度復元さ

れた建造物をそのままの姿で保存していく必要があるのか、さらに調査や研究が進む中で、新たな知見を得た場合はどうするのか、とりまく地域社会の変容などにどう対応するのか等、復元された後に検討すべきことは少なくない。まちがいなく、大半の復元建造物が、復元されたその姿を変えるべき局面に幾度も遭遇するだろう。すなわち、先にみたプロセス・プランニング的な計画の進め方が、遺跡の表現にこそ求められるともいえる。これはどのようにしたら可能なのか。そのヒントとなる整備スキームは現在いくつかの遺跡においてみることができる<sup>5)</sup>。その一つが御所野遺跡である。以下、詳しく御所野遺跡での整備の特徴についてみてみたい<sup>6)</sup>。

### 3 御所野モデル

#### (1) 御所野遺跡整備活用の特異点

御所野遺跡は岩手県一戸町に所在する縄文時代の集落遺跡である。平成5年(1993)に史跡に指定された後、平成10年より本格的に整備が開始され、平成14年にオープンする。令和3年(2021)には「北海道・北東北の縄文遺跡群」の構成資産の一つとして世界遺産に登録された。

御所野遺跡では、縄文時代の集落景観の復元が企図され整備がおこなわれてきた(図2)。御所野遺跡において実践されている整備活用の特異点について、大きく以下の3点にまとめることができる。

- A 整備前の実験的整備による整備内容の検証
  - B 整備後の継続的な検証・改良作業の実践
  - C 遺跡と地域の新たな関係性の構築
- 順にこれら特異点について確認してみよう。

#### A 本整備実施前の実験的整備による整備内容の検証

御所野遺跡では12棟の建物が復元されているが、これらの本格的な復元の前に、実験的に復元や仕上げ工事をおこない、その妥当性の検証をおこなっている。平成9年度の焼失住居の復元実験および、平成11年度のタタキ土間の実験的施工等がそれにあたる。

焼失住居の復元実験では、事前に検討した復元設計図をもとに施工がおこなわれ、その後2年間内部環境



図2 御所野遺跡

の調査など経過観察が実施され復元住居の問題点が整理された。施工過程およびその後の経過観察において、「葺土に適した土質およびその葺き方」、「室内湿度状況」、「換気上の問題」、「適切な屋根傾斜勾配」、「掘り込み深さと必要土量の関係」等に関する情報を得、復元案がリファインされ、その後の本整備がおこなわれている。

タタキ土間の実験的施工は、小型竪穴住居において実施された。縄文時代の竪穴住居では、地下からの湿気の上昇を防ぐため床を叩きしめている例が一般的であり、その再現のために伝統工法によりタタキ土間を構築する必要があった。復元住居全棟に施工する前に、問題の有無を確認するために実験的に施工され、施工後1年間の経過観察の後、問題がないことが確認され他住居への施工がおこなわれている。

一般的に整備事業において、机上の計画と現場での整備工事は線形に結ばれ、計画→工事という一義的な関係しかもち得ないことが大半である。これは先に確認した磯崎のいう、クローズド・プランニングの段階である。しかし、御所野遺跡においては計画と工事の間に「実験」というフェーズが挿入され、現場での実際的な問題を計画にフィードバックする機構が構築されているといえる。そして、その実験で得た知見は、現在の整備上の課題と当初の住居形態に起因する学術的な課題の双方、もしくはそれらが合わさったものとなり、整備上、学術上ともに意義のある知見を得ることに成功しているといえる。



## B 本整備実施後の継続的な検証・改良作業の実践

御所野遺跡においては、整備前以上に整備後の検証に自覚的であることが確認される。具体的には、「a. 整備された復元住居等を用いた実験」、「b. 実験結果をもとにした修理・修復」にその検証は大別できる。aにおいては、平成16年度の内部環境調査、平成17、18年度の焚き火実験、平成18年度の燃焼実験が、bにおいては、主に平成21年度以降に実施されている復元住居の修理事業があげられる。

こうした実践は、先にAで確認した整備前の志向の延長にあるが、計画に基づいて完成した復元住居を公開のためのものとしてのみ捉えるのではなく、実験・検証のためのフィールドともみなし、そうした実験・検証を通じて、新たな学術的知見の蓄積と修理・修復へのフィードバックをおこなっている。完成した史跡空間をまさに使いこなしているといえ、広義の活用の実践と捉えることもできよう。

オープン前であるが、本整備に並行して、その整備の一部を実験・検証に用いていることも確認できる。平成11年度、12年度の縄文道具を用いた伐採実験、縄文道具を用いた復元実験および使用部材量の調査がそれにあたる。また、平成11年度には平成9年度に実験的に復元した住居の火災実験がおこなわれ、学術的な知見を得るとともに、焼失した住居跡はそのまま屋外展示のひとつとして活用され、露出展示をおこなっている。学術的な実験・検証の過程さえも展示のひとつとするアイデアは評価できるだろう。

さて、先述したように、一般的な整備事業においては、本整備を完了すること、すなわち計画で描いた姿を滞りなく完成させることに注力され、その完成をもって整備が終わるという認識がもたれることが多い。しかし、史跡空間は文化財保護法により半永久的に保存されることが約束された場所であり、整備の完成はその史跡にとって終わりではなく始まりに過ぎない。よって、復元後にそれらをどう持続させていくかが課題となる。こうした課題に対して御所野遺跡は、復元した建造物を実験のフィールドともみなし、復元した当初の姿に拘らずその変化も許容し、常に最新の学術的知見により復元のリファインをおこなっている。

こうした復元後の継続的な実験や検証を重視する点は、御所野遺跡における最大の特異点といえるだろう。

また、整備報告書の刊行についてもその意識は一貫している。通常、整備事業に関する報告書は、計画に主眼が置かれるため、整備前に刊行されるものが殆どである。しかし、整備後の継続的な検証に重きが置かれる御所野遺跡においては、整備後に継続的に方向く書が刊行されていることがわかる。

## C 遺跡と地域の新たな関係性の構築

A、Bが主に整備の側面での特異点であるのに対し、Cは活用の側面での特異点である。御所野遺跡が整備後の継続的な検証に自覚的であることは先述したとおりであるが、こうした活動に地域住民を巻き込んでいくことも意図されていることが確認できる。こうした側面を端的に示すのは、平成20年度から本格的に開始された縄文里山づくりである。縄文里山づくりでは、学術的な検証から縄文時代の里山景観を復元することを大きな目的としてもつ一方、その里山を資源としてみなし活用していくことにも主眼が置かれている。具体的には、木を竪穴住居の建材や建築のための道具もしくは薪に、蔓を編み物に、草類やキノコ、果実を食料や酒に利用する等の取り組みが計画されている。

こうした活動を博物館担当者、研究者だけでなく、地域住民を巻き込んで継続的に実施することで、結果として縄文里山が徐々に形成されていくことが意図されている。これは、「縄文里山は縄文時代に生きた人々の日常的な活動の結果として生まれてきたものである。」という認識に依拠した整備活用の考え方であり、里山の形成過程そのものも概念的に復元しているともいえる。「整備されたもの」(ハード)を「活用する」(ソフト)という従来の整備活用概念からは離れ、使いながらつくるという新たな整備手法が提示されている。

遺跡はその地域のかつての営みの痕跡であり、歴史的な価値を有する一方、それが整備された史跡空間として現在の社会に現れた時、その地域にとっては新しい空間として捉えられざるを得ない。端的に言えば、遺跡は地域にとって古くて新しいものである。これは埋蔵し、その後の地域と断絶した遺跡において不可避

の問題である。よって、どれだけ歴史的価値を有していても、現在の地域社会にその史跡空間を繋いでいく視点が必要となる。この点において、地域住民を巻き込み、ともに史跡空間をつくりあげていく側面は大きな意義を認めることができるだろう。住民による主体的な史跡空間への関わりにより、自分たちの生活と関係が希薄であった史跡が、自分たち地域のものという認識に変化していくことが期待でき、結果的には史跡空間の持続に繋がっていくだろう。

## (2) 御所野モデルの構築

以上、御所野遺跡の整備活用における特異点を確認した。こうした特異点が御所野遺跡だけでなく、他遺跡の整備活用においても展開が可能な普遍的な側面をもつことも合わせて確認してきた。こうした側面の整理として、一般的な整備プロセス（以下、一般モデルとする）と比較しながら、御所野における整備プロセス（以下、御所野モデルとする）を概念的に提示する。

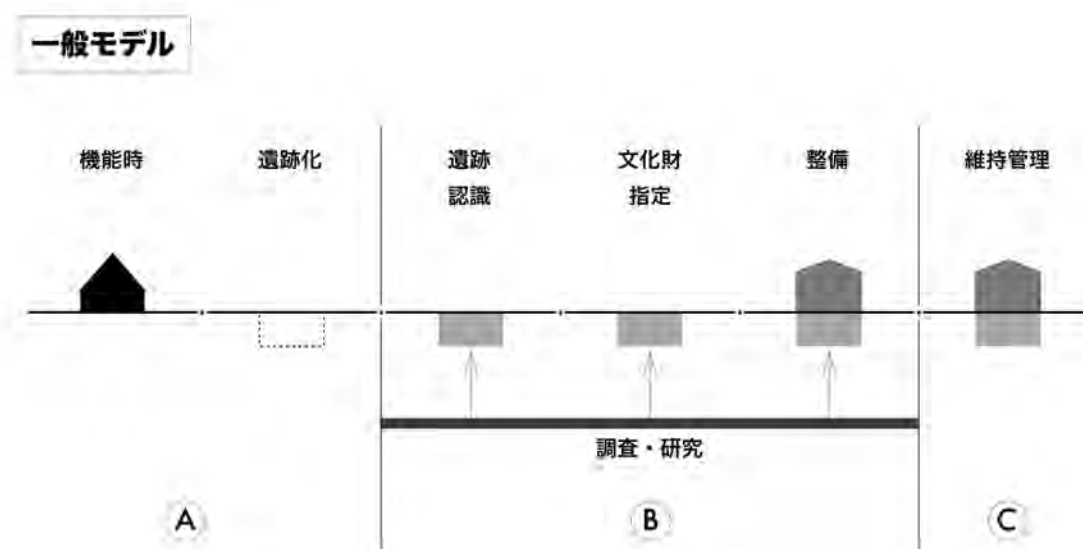


図3 一般的な遺跡の整備プロセス【一般モデル】

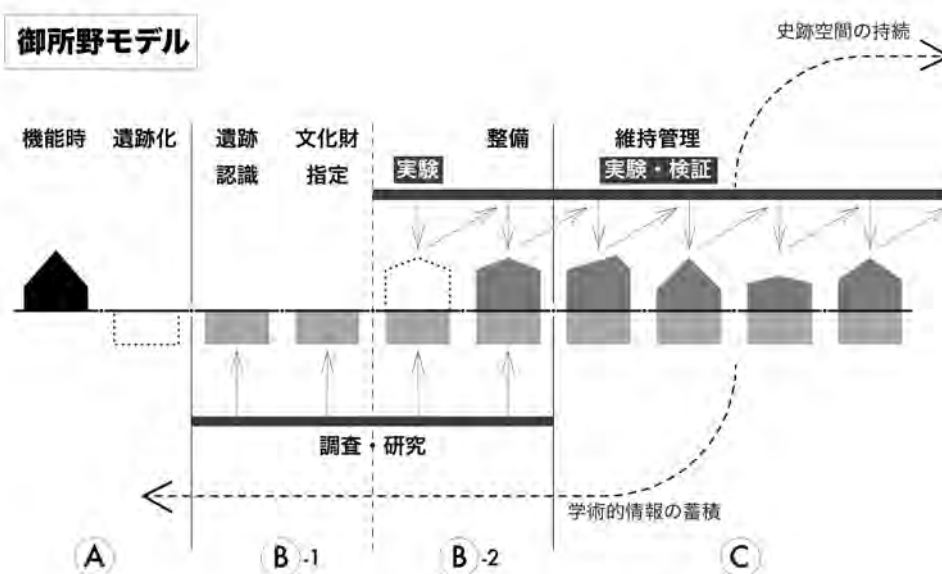


図4 御所野遺跡の整備プロセス【御所野モデル】

まず、一般モデルについて簡単に確認したい。フェーズとしては大きく3時期に分かれ、A 機能時およびそれが廃絶し遺跡化していく時期、B 遺跡が認識され、文化財指定がおこなわれ、整備が実施される時期、C 整備が完了し、活用および維持管理がおこなわれる時期、となる(図3)。調査・研究はB期に中心におこなわれ、文化財としての価値付および整備内容の根拠となる。

これに対して、御所野モデルは以下のようにリファインされる。大枠の3区分は変わらないが、B期において整備の前に実験フェーズが挿入される(B-2期)。実験によって得られた知見が整備計画にフィードバックされ、整備に反映される。またC期においても実験・検証が継続的に実施され、維持管理および追加の整備計画にフィードバックされる。ここでの実験・検証からは整備や維持管理に関わる史跡空間の持続に寄与する知見とともに、往時の姿を検証するための学術的知見の双方を得ることができる(図4)。

こうしたプロセスを採用することによって、一般モデルにおいて課題となる、社会的・学術的コンテキストの時間的変化への対応、現在・未来の地域社会との繋がりに対しての解決を試み、史跡空間の持続に大きく寄与しているといえよう。これは、磯崎が提唱したプロセス・プランニングの計画手法と非常に類似したスキームであることがわかる。

## おわりに

以上、プロセス・プランニングをキーワードにしなが、遺跡整備の課題を整理し、その課題に対して御所野遺跡での整備事例から解決の糸口を確認した。御所野遺跡での取り組みは、先史時代の遺跡であるために可能な側面もあるだろう。そのまま歴史時代の遺跡に適用は難しいかもしれないが、その手法の展開は広く検討されるべきである。

遺跡空間を社会において、どのように「生きた空間」として持続させるのか、この点が今後ますます問われることになるだろう。すなわち、史跡空間は時々学術的、社会的コンテキストの変化に応じて、その

姿を変え成長していくべきものとして考える必要がある。こうした認識に立つならば、整備計画に基づいてつくられたものは完成された絶対的なものではなく、可変性をもったもの、換言すれば仮設的なものとしても捉える必要があり、その仮説の連続の中で史跡空間は持続していくのであろう。計画手法もそれを支える制度も、再考のときがきているように思う。

### 【註】

- 1) 磯崎新「プロセス・プランニング論」『建築文化』1963年3月号(彰国社、1963)
- 2) 前掲注1)
- 3) 前掲注1)
- 4) 平城宮跡における整備内容については、以下に詳しい。『平城宮跡整備報告書』(奈良文化財研究所、2016)
- 5) こうした新しい整備手法が試みられている遺跡としては、御所野遺跡の他、本特集で佐野により報告されている梅之本遺跡等をあげることができる。
- 6) 御所野遺跡における整備および整備後の活動については、『御所野遺跡環境整備事業報告書Ⅲ—総括報告書—』(一戸町教育委員会、2017)に詳しい。また、本特集の若狭による論考においても御所野遺跡の取り組みが報告されており、参照されたい。  
なお本稿は、筆者が『御所野遺跡環境整備事業報告書Ⅲ—総括報告書—』において執筆した「評価」の内容をもとに、再構成したものである。

### 【図版出典】

- 図1 日本建築学会編『近代建築史図集 新訂版』(彰国社、1976)  
図2 筆者撮影  
図3, 4 筆者作成